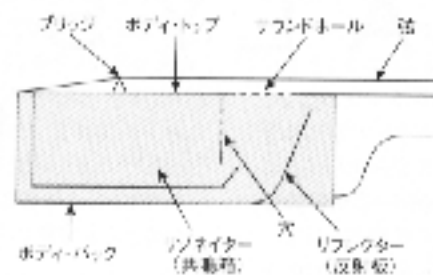


4D型のサウンドを特徴づけるボディ内部の構造。



に対する強度を上げると同時に、木部内における振動の伝達速度を上げ“軽量で響くボディ”を形作る。大胆なカットウェイもまた独自のアイディア。

L-5などのギブソン・ギターにカットウェイが施されるのが1930年であることから、このモデルの先進性がうかがわれる。エボニーから作られたブリッジは、底面が湾曲しており、左右両端の2点でボディ・トップと接触している。弦のテンションがボディを押す方向にかかることもこのギターの特徴と言える。つまりフラット・トップに似た外見をしているものの、サウンドを決定づける振動系に関しては、アーチトップに近い。テンションのかけ方、カットウェイ、フィンガーボード・エッジ、テイルピース、これらの特徴を総合してみると、マリオはF-5タイプのフラット・マンドリンからヒントを得てこのモデルをデザインしたのではないだろうか。

第二のボディが握るサウンドの秘密

大きく口を開けたD型のサウンドホールの内部には、重大な秘密が隠されている。驚くことにボディ内部のサウンドホールから下方部分には第二のボディとも言えるリゾネーター（サウンド・チェンバー）が組み込まれている（図参照）。これは、ボディ・トップ面から吊り下げられるように取り付けられており、サウンドホール側の側面に開けられた穴と、その下側のすき間から、空気振動を内外へと伝達する。またサウンドホールのネック寄りにはリフレクターと呼ばれる壁がボディ・バック面から取り付けられており、チェンバーから排出された空気をサウンドホールへと導く役割を果たしている。マリオはギターのパック部分の振動が演奏者の身体によってさえぎられるのを防ぐために、このセカンド・チェンバーを考案したと言われている。その効果に疑問を投げかける者もいるが、サウンドに大きく関わっていることには変わりなく、複雑化された空気振動の流れによって独自の残響音がもたらされる。

1934年から製造された後期のモデルでは、仕様の一部が変更され、よりソロ楽器としての側面が強くなる。ジャンゴはこちらのタイプのモデルを好んでいた。ネックのジョイント部分は14フレット位置へと移動し、26 3/8インチのロング・スケールへと変更され、21フレット指板となる。また、ユニークなリゾネーター・システムは取り払われ、トーンを決定づけるサウンドホールは、小型のオーバル型へと改められる。十分な音量と独自の豊かなトーンという独創的な特徴が、“あたかもピアノを思わせる音色”と語るジャンゴがギターに求めた要素と一致していたのである。アーチトップ・ギターが、コード・カッティングを目的としたレンジを絞った歯切れ、という方向へ進化していったのに対して、セルマー・ギターは、ソロ楽器に要求される音の通りと明るさ、そして単音の速いパッセージに対応するレスポンスの良さ、そ

った特徴を持つ唯一無比の存在と言える。ギターと音楽が一体となる形で形成されたジブシー・ジャズ……それはフラメンコとフラメンコ・ギターの場合と同様に、ふたつの相互作用によって形作られた表裏一体のものと言えるだろう。

今に蘇るセルマー／マカフェリ

約20年間にわたって製造されたモデル・ジャズのトータル製造台数は約1000本。皮肉なことにギターがソロ楽器として大きく需要を延ばすのは製造が完了したのらのである。その後、代用が利かないセルマー・ギターを求める声は強く、何人もの製作家たちが、それぞれの思い描いたセルマー・ギター・タイプの製作を行なってきた。中でもジャック・ファビノはその代表格として長年にわたってギターを作り続け、現在も息子のジャン・ピエールによって引き継がれている。近年ではオリジナル・セルマーの構造や特徴が詳しく研究されることで、リアルなリイシュー・モデルが登場している。また、現在の演奏スタイルに合わせたネック・グリップや、ピックアップ・システムといったものを積極的に取り入れたモデルも製作され、楽器自体も手に入りやすい状況になってきた。中でもモーリス・デュボン、デル・アルテらが代表格として高く評価されており、これらのギターを使った音楽活動などによって、今日では、ジブシー・ジャズ／ジャンゴ・ラインハルトの静かなブームとも呼べるが現象が訪れている。

独自のものだった。そして、これがセルマーのイギリス代理店の目にとまることになる。

現在も管楽器メーカーとしてその名が知られているセルマー社は、管楽器及びそれ用のリード（口にくわえる振動板）を製造／販売するメーカーだが、マリオが作ったユニークなギターに感銘を受け、フランスにある自社の工場に彼のギターを製品化するための契約を交わす。そしてマリオは、製造工房を設立するためにセルマー・ギターの技術部門の責任者としてフランスへと渡り、32年にセルマー／マカフェリ・モデルが誕生した。これがD型のサウンドホールを持つ前期型のモデルである。しかし、諸事情によって、翌33年に彼は同社を去ってしまう。30年代後半にアメリカへと移住したマリオは、プラスチック素材を使用した管楽器のリード、ウクレレなどを製造し成功を収める。また、セルマー時代のギターに似た外見を持つマカフェリ・ギターもプラスチックを使って製造された。一方マリオが去ったあとのセルマー社では、ギターの改良を行なうとともに、1952年までギターの製造が続けられた。これらがオーバル（楕円）型のサウンドホールを持つ後期モデルに相当する。

モデル・ジャズの斬新な構造

当初セルマー社から発売されたセルマー／マカフェリ・モデルは、ガット弦を含めた4機種。その中で、ジャンゴが使用したことと知られるモデル・ジャズの斬新でユニークな特徴について述べていこう。ウォルナット材から作られたネックは、12フレット部分でボディとジョイントされているが、カットウェイによって1弦側は15フレットまで、ボディから露出している。またエボニー材から作られたフィンガーボードの1弦側は、なんとサウンドホールの中心まで延長されていて、24個のフレットが打たれている。つまり、このモデルはソロ・プレイを前提としてデザインされていたことになる。当時のギターの役割は、オーケストラやジャズ・バンドでのコード演奏が主体だったことを考えると、まさに画期的、その後に訪れる新しい演奏スタイルを示唆するものでもあった。スケールは24 3/4インチ、また、同モデルには、特別に製造されたカバード・タイプのチューナーが取り付けられているが、アメリカのグローバー／クルーソン社の手によるカバード・チューナーの登場は、1937～38年まで待たなくてはならない。

ボディ部分にも、多くの画期的な仕様が盛り込まれている。スプルース材が使用されたトップは15 3/4インチ幅。サイド／バックにはローズウッド、マホガニー、メイプル、スプルースといった材を3枚合わせたラミネート構造。これはボディを軽量化するために材を薄くした際にも十分な強度を確保するための方法であり、当時の状況を見ると、単板で製造するよりも高価だったと思われる。トップ／バック面にはとても緩やかなアーチが作られることで、外側からかかるテンション



ジャンゴの愛用者と呼ばれた相応しいジブシー・ギターリスト、ドレリウス・クレインが、昨午5月に来日した際に使用していた、マカフェリ・モデルのセルマー／マカフェリ・タイプ。ボディ・トップには40年ものスプルース単板を採用した逸品。彼は同社のマカフェリ・モデルを何本も所有しているという。これはその中でも一番目に作られたものだろう。フィッシュマンのピエゾPUを内蔵。